

研究課題名：発達支援を必要とする児とその家族に対する保健師の支援

研究者名：古川 綾

研究成果概要

【目的】

宮崎県内の発達支援を必要とする児やその家族に対する保健師の支援の現状を明らかにすることである。

【方法】

研究対象者は発達支援を必要とする児やその家族への支援に携わった経験をもつ市町村保健師とした。宮崎県内の全26市町村のうち25市町村から研究協力を得られ、調査対象となった124名の対象者に自記式質問紙を配布した。調査項目は、基本属性15項目、支援強化のための取り組み10項目、保健師の支援内容24項目で構成した。各質問項目の記述統計を確認後、それぞれの関連について χ^2 検定、Fisherの正確確率検定、線型と線型の連関で分析をした。

【結果】

回収した調査票は113名（回収率91.1%）であり、113名（有効回答率：91.1%）を分析対象とした。分析の結果、以下のことが明らかとなった。

①経験年数と保健師の支援内容の関連について、「専門的な医療・療育機関を紹介する」（ $p=0.047$ ）の支援において有意な線型傾向が認められ、経験年数が長くなるにつれて実施割合が高い傾向が示された。

②市町村人口と保健師の支援内容との関連については、有意な差が見られた支援内容の項目は、すべて人口3万人以上の市町村の方が人口3万人未満の市町村と比較して実施割合が高かった。

③保健師が行った取り組みと保健師の支援内容との関連については、支援強化のための取り組みの8項目のうち6項目において、複数の保健師の支援内容との間に有意な差が見られた。特に「発達面で気になる児と親に関する事例検討を実施する」という取り組みを行った保健師は、「児の発達面の問題に対する親の認識を確認するために養育方針について確認する」（ $p=0.015$ ）、「支援の方向性を検討する上で、親の人柄を確認する」（ $p=0.026$ ）、「健診等で気になった児に関わった場合は地区担当保健師に申し送り、継続支援につなげる」（ $p=0.037$ ）、「児の特徴を明確にするために集団の中での児の特徴を親が捉える機会をつくる」（ $p=0.017$ ）、「些細なことであってもその子なりの成長を見つけて伝える」（ $p=0.032$ ）「親が児の発達面で気になる事に関して多職種に相談できるような機会をつくる」（ $p=0.042$ ）、「市町村で行なっている発達相談事業に参加してもらえるように働きかける」（ $p=0.010$ ）、「親の育児負担の程度を把握する」（ $p=0.026$ ）、「父親の育児のサポート状況について把握する」（ $p=0.022$ ）、「家族の健康状態を気にかけるような声かけをする」（ $p=0.010$ ）と多くの支援内容の実施と有意な差が見られた。

【考察・結論】

【key words】

発達障害 保健師 支援 経験年数 市町村人口

【研究成果の発表など】

なし

本研究は今後も継続して研究を進め、令和8年度に修士論文を提出する予定である。

研究課題名：2型糖尿病男性患者配偶者が行っている食事支援内容と思い

研究者名：桐原 千宙

研究成果概要

【目的】

2型糖尿病男性患者配偶者の行う食事支援に関する保健師の支援を検討するために、配偶者が行っている食事支援内容と意思を明らかにする。

【方法】

半構造化面接法による質的記述的研究

【結果】

食事支援内容は178のコードから25のサブカテゴリと《情報収集や学習で得た知識を活用した食事準備》《身体や食費に配慮した食品使用と食事準備》《薄味や調味料に配慮した食事準備》《カロリーや摂取量を意識した調理法や量調整と嗜好品準備》《満足感と糖尿病食摂取継続を支える五感や摂取量への配慮》《セルフケアを助けるための協力や意図的な食環境整備》《食事摂取方法の理解を促す声かけと働きかけ》の7のカテゴリが生成された。

食事支援の思いは120のコードから25のサブカテゴリ、13のカテゴリと【家庭の食事提供者として情報収集や糖尿病食作りを担う初期の負担感】【食事を支えていく負担感と夫との関わりからの感情の揺れ】【理想的な療養継続のための願いや期待】【食事提供者の覚悟と役割意識】【支援継続への前向きな姿勢】【夫や自分の意識・知識向上のための専門職への期待】の6のコアカテゴリが生成された。

【考察・結論】

配偶者は、【理想的な療養継続のための願いや期待】【食事提供者の覚悟と役割意識】から、《情報収集や学習で得た知識を活用した食事準備》を行い、支援を開始するが、開始時期は【家庭の食事提供者として情報収集や糖尿病食作りを担う初期の負担感】がある。また、支援を行っていく中でも【食事を支えていく負担感と夫との関わりからの感情の揺れ】があるが、《身体や食費に配慮した食品使用と食事準備》《薄味や調味料に配慮した食事準備》《カロリーと摂取量を意識した調理法や量調整と嗜好品準備》など、日常生活の中で食事作りができるよう工夫し食事の準備をしている。また、夫を思いやり《満足感と糖尿病食摂取継続を支える五感や摂取量への配慮》《セルフケアを助けるための協力や意図的な食環境整備》を含めた食事の提供と、《食事摂取方法の理解を促す声かけと働きかけ》を行っていた。配偶者は支援の負担感も抱いているが、【支援継続への前向きな姿勢】もあり、支援者同士で支援内容を教え合い学び合いたい、支援の思いを共有したいという思いや、専門職から効果的な食事を作る方法を学びたいという思い、夫自身でもセルフケアに取り組んでほしいという思いがあった。そのため、【夫や自分の意識・知識向上のための専門職への期待】があると考えた。

以上から、配偶者の行う食事支援に関する保健師の役割として4つの支援を考えた。

1) 支援初期の負担感軽減と食事提供者の覚悟と役割意識を支える支援

情報収集の負担感を軽減し、食事作りの自己効力感を高めさせるよう関わる。

2) 食事支援を無理なく継続できるための支援

食事作りの負担感を軽減し、糖尿病食作りと日常生活の両立を助けるために、他の配偶者が行っている工夫も含めた情報提供を行う。夫の糖尿病食摂取継続やセルフケアにつながる支援についての情報提供を行う。専門職と支援者同士から食事支援について学ぶ機会を提供する。

3) 良好な夫婦の関係を保ち、前向きな気持ちで食事支援が継続できるための支援

良好な夫婦関係が継続されるよう両者の理解や誤解・不満の解決を促す。支援者の仲間を作ることができるよう助ける。

4) 専門職に夫のセルフケア意識を高めてほしいという期待に応える支援

配偶者の声を医療関係者に届ける。

【key words】

2型糖尿病、男性患者、配偶者、食事支援内容、思い

【研究成果の発表など】

修士論文発表会

様式3 (博士前期)

令和 7 年度 大学院博士前期課程学生奨励研究 研究成果報告書 (概要)

研究課題名：A 保健所管内の労働者におけるヘルスリテラシーと生活習慣の関連

研究者名：松井 俊樹

研究成果概要

【目的】

本研究の目的は、A保健所管内の労働者に対する生活習慣病予防への支援の示唆を得るために、A保健所管内の労働者における生活習慣の実態を把握し、ヘルスリテラシーと生活習慣の関連を明らかにすることである。

【方法】

研究対象は、A保健所管内の11事業所に就業している、18～64歳の労働者であり、自記式質問紙を各事業所11箇所にて1249名に配布し、質問紙とインターネットでの回答を得た。調査項目は、基本属性31項目、生活習慣15項目、ヘルスリテラシー5項目の計51項目で構成した。各質問項目の記述統計を確認後、それぞれの関連について χ^2 検定、Mann-WhitneyのU検定で分析した。

【結果】

回収した調査票は、質問紙 742 件、インターネット 163 件 (回収率 72.5%) であった。そのうち、832 件を分析対象とした (有効回答率 66.6%)。分析の結果以下のことが明らかとなった。

- ① 健診結果受診の有無について、「毎年受診」が 821 人 (98.7%) であり、対象者のほとんどが健診受診の機会があった。また、健診結果の総合判定については、「異常なし」が 249 人 (30.0%)、「軽度な異常あり」が 150 人 (18.1%)、「要経過観察」が 229 人 (27.6%)、「要精密検査」が 125 人 (15.1%)、「要治療」が 38 人 (4.6%) であり、6 割以上に有所見があった。
- ② 食習慣・運動習慣について、野菜摂取の頻度 (1 週間の内、何日野菜料理を 1 日 5 皿以上食べるか) は「ない (0 日)」が 226 人 (27.3%)、運動習慣の有無について、「いいえ」が 639 人 (76.9%) であった。
- ③ ヘルスリテラシー (CCHL) について、CCHL の合計得点の平均値は 3.39、SD は 0.66、最小値 1、最大値 5 であった。
- ④ ヘルスリテラシーと生活習慣の関連について、「生活習慣改善行動有り」の者はヘルスリテラシー高群が有意に多かった ($p < 0.001$)。ヘルスリテラシーと食習慣・運動習慣に関する関連について、ヘルスリテラシー高群ほど、運動実施頻度 ($p = 0.033$)、主食・主菜・副菜がそろふ頻度 (1 週間の内、何日 1 日 2 回以上主食・主菜・副菜がそろふか) ($p < 0.001$)、野菜摂取頻度 (1 週間の内、何日野菜料理を 1 日 5 皿以上食べるか) ($p < 0.001$) が高く健康的な食習慣・運動習慣を送っており、有意な関連がみられた。

【考察・結論】

【key words】

【研究成果の発表など】

今後引き続き研究を進め、令和 8 年度に修士論文提出予定